

## シベリア伐採の思い出と

### 捕虜を終わって

岐阜県 西尾 正男

昭和二十年八月、終戦の満州よりソ連シベリア、ハバロフスク、ケドロフカという所に到着、第五五二労働大隊として駐屯し、直ちに草原の草刈りやバレイシヨの收穫に狩り出されラポーターをしていたが、約一か月を過ぎたころ、十月ころと思いますが、チオルネフカの伐採に五か月ほどと思いますが、吉田隊より約二十人ばかり分遣されたことである。山中に来て見れば千古斧鉞の原始林であった。丸太を四方に積んだ堀立小屋で今でいうログハウスの最も貧弱な最低の小屋で、シラミに攻められながらひもじいこと、苦しいこと、悲しいこと、寂しいこと、数々の思い出は到底筆舌に尽くすこととはできません。

けれども、常に故郷へ帰る強い信念を堅持して毎日の

労働に耐えておりました。伐採隊員は昭和二、三年生まれの血気盛んな義勇隊出身と若い兵隊ぞろいでありましたが、酷寒零下雪中にて大樹の伐採はなれない作業隊員には容易でなかった。

これはこれとして、私の紹介したいと思うことは、作業隊指導員、名前を忘れましたのでナチャアニックと呼んでおきます。我々作業隊員一同は苦しい中にもこのナチャアニックとの出会いによりせめてもの救いの女神であった。私と同じ年ころの三十四、五歳前後で、背は高く、やせ型、無口で愛想はないが、質素で優しく、怒ったことなど一度もなく、また戦勝国として優越感とか我々を捕虜として軽蔑するような気配もなく、ひたすら作業指導と危険防止にも注意を払ってくれて、本当によく協力してくれました。ヤボンスキーは祖国ヘダモイまで身体大切にして伐採作業に従事するよう大変な心遣いで、日本人捕虜に対して慈悲深いソ連人であった。

あるとき一日の作業を終え、日没ともなれば腹はペコペコだ。まだ一時間ほど歩いてラーゲルに帰らねばならない。こんなときマンドリンの自動小銃を肩からかけた

警戒兵が出てきて、まだノルマが足りない、達成せねばラーゲルに帰さぬと言い出し、窮地に陥ったとき、ナチャアニックに目くばせで哀願すると、彼は早速我々捕虜の作業隊員の味方となってくれ、いきまゝ若いソ連の警戒兵をなだめてくれた、よきソ連の監督の存在だった。ノルマがなかなか達成できない場合は、ちょうど日本という秋葉様のお祭りで各町内ごとに大きなかがり火を燃やして大きなたき火のお祭りがあるが、その火の明かりを利用して夜遅くまで伐採作業を続行したこともあり、また降雪のあった場合は、一メートルくらいの積雪の雪かきをしてから伐採作業開始です。また兵隊はきまってこのナチャアニックにマホルカという刻みタバコをダイ・クリーとねだると、その都度心よく嫌な顔もせず手製の布袋からタバコをつまんで出し、みんなに分けてくれた。彼とて配給のマホルカの手持ちがなくなるのと、今度は反対に日本の兵隊が彼にタバコを渡している光景も時たまあった。いま一つ感心したことは、兵隊に毎日せびられるにきまっているマホルカを、性こりもなく毎日減らさず持つてくることであった。このお人好し

の素朴な人柄、人種の偏見もなく人種の差別もないのは感心の至りでした。本当に捕虜に親切心があったナチャアニックとも別れるときがきた。

昭和二十一年正月も終わり、二月末ころのこと、極寒静寂深々として更ける山中の真夜中、我がラーゲルに時ならぬドアをノックする音に何事かと開けてみると、防寒服に身を固め、外気でまつ毛が真っ白に凍っているソ連人が入ってきたので、びっくりしながらよく見ると、指導員のナチャアニックではないか。単語とゼスチャーで察するところ、彼は急な命令で今日早朝シベリア鉄道ラゾ駅発にて遠い遠いコーカサス地方とかへ転勤することとなり、別れのあいさつに來たという次第であった。それぞれ祖国の夢路をたどっていた捕虜の兵隊たちも一斉にはね起き、異口同音にナチャアニック、スパシーボ、スパシーボの連呼であった。各人に固い握手を求め、恐らくこれがお互いの永遠の別れともなるう惜別の情が、国境を超え心温まる送別のニコマであった。

さて、この世にこんなナチャアニックのような人たちがばかりだったら、戦争ごともなく、平和におさまるので

はないかと感を深くするとともに、ソ連のおえら方もこの優しいナチャアニックの爪のあかでも煎じて飲んだら、我が北方領土四島の返還復帰もい少しスムーズに話が運ぶのではないかと思うのは私だけではなからうかと残念である。わずか四か月足らずのナチャアニックとのつき合いであったが、愚直なほどお人好しだったナチャアニックの面影は、あの暗い陰うつな捕囚生活の中にも幸い明るいエピソードの一つとして、いまだに脳裏に去来してやまない。

ラーゲル内での苦渋に満ちた思い出について、現在では個々の人々について私個人としては一片の怨念も残らない。お互いに苦しい経験を乗り越えて、さらに帰国の困難に耐えて今日の平和な生活を築いた戦友に心から感謝して、楽しく語り合うことを望んでいる。

三年四か月間の捕虜時代を振り返ってみて、多数の戦友たちの記憶をたどり、「私の三年四か月間は、果たして何だったのか、我々の心に何を残したのか」が胸中に去来して去りがたい思いがする。

昭和二十三年十一月末、舞鶴港に上陸してまず私の感

じたことは、「国敗れて山河あり」懐かしい故郷の温かみであったが、同時に三年四か月の薄暗い陰惨な重々しい捕虜生活からの解放感であった。家族との再会の期待とともに前途の生活についての不安感が工作した複雑な想いであった。当時は完全な虚脱状態のいわゆる捕虜げけ状態であったのであろう。

最後に、酷寒異郷の地に果てた数万人の戦友たち、開戦直後我々の楯として散華された特攻隊の方々、さらに犠牲となられた多数の民間人のみたまに心から哀悼の意を表します。

## シベリアの記

岩手県 笹川 博

終戦を満州の興安嶺のオンドル部落で知ったのが昭和二十年八月二十九日、戦い済んで私は病氣となり、興安の野戦病院からチチハルの陸軍病院へ入院、病院での我々への悪口は興安のカラス部隊。一か月戦闘をし、敗